第35回　歯科衛生研究会プログラム

日時　平成23年7月13日（水）16時30分～19時35分

会場　日本歯科大学新潟生命歯学部　アイヴイホール

<16:30-16:35>

「開会の辞」

シンポジウム：『 女性にとっての仕事をするということは？！ 』

座長　宮崎晶子

<16:35-17:15>

1．『 女性と職業 』

伊勢村　知子（日本歯科大学新潟短期大学）

<17:15-17:50>

2．パネルディスカッション

<17:50-18:00>

感謝状の授与

<18:00-18:10>

休憩

一般講演

座長　相方恭子

<18:10-18:20>

1．平成22年度歯科衛生科におけるインシデント報告の集計と過去2年間との比較分析

○拝野敏子[1]、本間浩子[1]、土田江見子[1]、高野貴子[1]、佐野公人[2]

（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟生命歯学部歯科麻酔学講座）

<18:20-18:30>

2．平成22年度　学術・研究グループ活動報告

～モチベーションの維持・向上の難しさを感じた一年～

○川崎美紀[1]、長谷川沙弥[1]、遠藤祐香[1]、野島恵実[1]、坂井由紀[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]

（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<18:30-18:40>

3．歯科衛生士による口腔清掃使用器材の情報提供について

○池田裕子[1]、風間雅恵[1]、渡部　泉[1]、吉富美和[1]

（[1]新潟病院歯科衛生科）

<18:40-18:50>

４．歯科衛生士による地域貢献のための事前調査
～歯科保健活動への要望の把握～

○小林えり子[1]、池田裕子[1]、佐々木典子[1]、川﨑美紀[1]、拝野敏子[1]、榎　佳美[1]、山崎明子[1]、船山知子[1]、藤田浩美[1]、三富純子[1]、末高武彦[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟生命歯学部衛生学講座）

座長　土田江見子

<18:50-19:00>

５．歯科衛生士業務に関する問題を明確にする取り組み

○鈴木明子[1]、坂井由紀[1]、佐々木典子[1]、高野貴子[1]、関根千恵子[1]、池田裕子[1]、藤田浩美[1]、三富純子[1]、近藤敦子[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<19:00-19:10>

６．当院における歯科衛生士の材料管理業務を改善するための取り組み

○内山美幸[1]、風間雅恵[1]、白井かおり[1]、松木奈美[1]、高野貴子[1]、関根千恵子[1]、相方恭子[1]、藤田浩美[1]、海老原　隆[2]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科）

<19:10-19:20>

７．歯科衛生士が担当する患者の情報記録書式の標準化とその効果

○長谷川沙弥[1]、遠藤祐香[1]、野島恵実[1]、小山由美子[1]、吉富美和[1]、坂井由紀[1]、鈴木明子[1]、藤田浩美[1]、三富純子[1]、阿部祐三[2]、両角祐子[3]、佐藤　聡[3]
（[1]新潟病院歯科衛生科、[2]新潟病院総合診療科、[3]新潟生命歯学部歯周病学講座）

<19:20-19:30>

８．新潟病院総合診療科における診療用基本セットの使用状況調査

○相方恭子[1]、関根千恵子[1]、澤田佳世[1]、白井かおり[1]、内山美幸[1]
（[1]新潟病院歯科衛生科）

<19:30-19:35>

「閉会の辞」

シンポジウム講演

女性と職業

○伊勢村　知子
日本歯科大学新潟短期大学

人間として生まれ子供を生み育てたいという願望は自然なことである。また、人間として生まれ職業を通して自己実現をはかりたいと考えるのもまた自然なことだと思われる。そして、この願望は男女に共通したものだと思う。然し日本の社会は、「男は仕事、女は家庭」という役割分担のもとに築かれてきた。ようやく近年その役割分担がわずかずつ崩れかけてきたように思う。

本口演では、前半で私自身の職業生活を紹介するので、現状と対比して約３５年間の変化を感じ取ってもらえたらと思う。

後半は厚生労働省が発表している「平成２２年版　働く女性の実情」を紹介する。

このレポートでは、

- 女性の年齢別の労働力人口の比率
- 結婚しているか否かによって、仕事につく比率がどう違うか
- 失業率の昭和６０年から平成２２年までの推移
- 雇用者数と雇用者総数に占める女性の割合の推移
- 産業別雇用者数
- 非正規職員の割合の変遷
- 男女の賃金格差
- 女性の就業率変化の要因分析
- 有配偶世帯の妻の就業率の変化の要因分析
- 女性の年齢階級別就業形態
- 子供のいる妻の就業形態の推移
- 男女別の就業率と潜在的労働力率
- 求職活動をしていない人の「就業を希望しない理由」
- 女性労働者が今の職場で働き続ける上で必要なこと
- 就業継続のため希望すること

などを扱っている。

現状を把握した上でよりよい職場環境にむけて改善点を整理し、社会にむけて働きかけていって欲しいと思う。

平成22年度歯科衛生科におけるインシデント報告の集計と過去2年間との比較分析

新潟病院歯科衛生科○拝野敏子　本間浩子
土田江見子　高野貴子
新潟生命歯学部歯科麻酔学講座　佐野公人

【目的】医療事故の予防や減少の為には、インシデント・アクシデントを正確に把握し、分析と改善策の立案、実施とそれを評価する仕組みが重要である。我々リスクマネジメントグループでは、平成20年度より「病院組織の一員として自覚を持ち、安心・安全な歯科医療を提供する」を目標に、活動の一環として、インシデント報告書の集計、分析を行ってきた。そこで今回、平成22年4月1日～平成23年3月31日までに日本歯科大学新潟病院歯科衛生科へ提出された、インシデント報告書の集計結果と、平成20年度・平成21年度との比較、ならびに平成22年度に実施したインシデントに関するアンケート調査の集計結果を分析し報告する。

【対象】日本歯科大学新潟病院歯科衛生科（臨時職員を含む）歯科衛生士32名

【集計方法】①体験項目別件数、②体験者の病院勤務経験年数別件数、③体験場所別件数、④月別件数、⑤曜日別件数、⑥発生時の状況別件数、⑦アンケート集計

【結果】平成22年度におけるインシデント報告件数は65件であった。①体験項目別では、多かった項目は、「受付での処理の不備」と「職員間の伝達不足」が同数で16件であった。②病院勤務経験年数別では、「2年未満」4件、「2～5年」12件、「6～15年」35件、「16年以上」14件であった。③体験場所別では、多かった場所から「総診4」と「口腔外科」17件、「総診3」と「小児・矯正」6件であった。④月別では、6月・5月・7月が多かった。⑤曜日別では、「月曜日」9件、「火曜日」18件、「水曜日」17件、「木曜日」15件、「金曜日」6件であった。⑥発生時の状況別では、「非常に多忙」4件、「やや多忙」15件、「普通」36件、「やや余裕あり」8件、「余裕あり」2件であった。

【考察】この3年間で、同様な事例が報告されているが、報告数は減少している。過去2年間と比較して大幅に減少していることは、アンケート結果より改善策の実施による効果・報告数の低下と、平成22年度は受付に事務員が配置され受付業務が減少した為と考えられる。今回の集計結果より、繰り返し起きている事例に関しては改善策を立て実行し、報告率の低下に関しては、報告書を提出しやすい環境作りを継続していく必要があると再認識した。

平成22年度　学術・研究グループ活動報告
～ﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝの維持・向上の難しさを感じた一年～

新潟病院歯科衛生科　○川﨑美紀　長谷川沙弥
遠藤祐香　野島恵実
坂井由紀　三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【はじめに】

近年、歯科医療の発展や患者の歯科医療に対する関心・意識の高まりに伴って、歯科衛生士もより高度な知識と技術が求められている。歯科衛生士がその専門性を高めるために、学術研究活動を行い、情報を共有化していくことは重要である。われわれ学術・研究グループは、平成22年度も「歯科衛生士関連学会にて学術・研究発表をするために、モチベーションの向上を図る」を目標とし活動を行ったので報告する。

【活動内容】

- 情報提供（情報誌：Studyニュース、学内講演会・講習会の案内およびアンケート）
- 入会している学会・参加した学会・学術研究活動の内容を把握するためのアンケート
- 歯科衛生科の業績報告作成
- 新人・現任教育（パワーポイントの使用方法）

【活動結果】

学内において参加した講演会・講習会のアンケート結果では、平成21年度同様、歯科衛生研究会や歯周治療・口腔ケア関連の講演会参加者が多かった。また、平成21年度と平成22年度を比較すると、平成21年度は17回の講演会・講習会が開催され、一人当たり平均6.4回参加していた。平成22年度においては、19回開催され、一人当たり5.3回と平成21年度に比べ減少した。最も参加の多い歯科衛生研究会でも、平成21年度は、参加者75.4%、演題数8題に対し、平成22年度は参加者73.5%、演題数6題と減少した。

【考察・まとめ】

平成22年度は、平成21年度より、参加回数や歯科衛生研究会への参加が、全体的に減少傾向にあった。また、学会や歯科衛生研究会での個人の発表の増加もみられない。しかし、一方で、平成22年度は県内開催の学会が多かったこともあり、学外での参加者は多くみられた。これらより、学術・研究活動に対するモチベーションを維持し、向上することは難しいということを実感するとともに、興味のある分野では追求する姿勢がみられるようになったと感じた。

今年度は、県内で歯科衛生学会も開催予定であり、学会発表に向けた支援を行い、さらなる本院歯科衛生士の学術・研究に対するモチベーションの向上に繋がればと考える。

歯科衛生士による口腔清掃使用器材の情報提供について

新潟病院歯科衛生科　○池田裕子　風間雅恵
渡部泉　吉富美和

【はじめに】新潟病院歯科衛生科口腔ケアグループでは、効果的な口腔ケアを提供する体制を整えるために活動を継続中である。以前の発表では器材についてアンケートの結果、歯科衛生士の配属先によりケアに使用する器材にバラつきがみられると報告したが、今回多種ある材料から選択しやすいように情報提供用紙を考えたのでこれを報告する。

【方法】①歯科衛生士が患者への口腔清掃を行う場面を想定し、対象を小児　成人　要介護高齢者（障害者を含む）として口腔清掃の手順を表した。また新潟短期大学において学生にどのように教育されているかを調査した。

②総合診療科２，３，４　小児・矯正科　口腔外科　インプラントセンター　在宅歯科往診ケアチーム　口腔ケアセンターで口腔清掃に使用している器材を調査し資料を確認した。

③口腔清掃の手順に沿って使用する器材をその特徴、適応とともに明記した。

【結果】小児においては矯正中の患者への清掃を区別して考える必要があり、装置の種類やステージで清掃方法や手順が異なった。また口腔外科手術後の患者もその病態によって清掃方法に差があった。成人においては過去に発表された本学歯周治療科でのプロフェッショナルケアの方法と新潟短期大学生への教育内容も加味し、歯科衛生士が主として関わる歯周メインテナンス患者への手技の例を挙げその目的とともに使用器材を明記する必要があった。要介護高齢者（障害者）においては舌、粘膜を含む口腔全体をケアすることが多く明確な手順を示すのは困難であった。

【考察と今後の課題】各診療科での使用器材は一律ではなくより目的に合ったものを選択することは大変困難である。そのための情報提供として資料は有用であると思うが術者の手技技術を上げるものではない。今後この手順書を臨床で参考にしてもらい改善を加える必要がある。また新しい器材の情報を共有し有効に活用するために情報伝達経路の確立とともに歯科衛生科内の他ワーキンググループと連携しながら手技を含めた使用方法の講習会を実施し各々の技術向上への手がかりを作ることを考えて行きたい。

歯科衛生士による地域貢献のための事前調査
－歯科保健活動への要望の把握－

新潟病院歯科衛生科
○小林えり子　池田裕子　佐々木典子　川崎美紀
拝野敏子　榎佳美　山崎明子　船山知子
藤田浩美　三富純子
新潟生命歯学部衛生学講座　末高武彦

【目的】近年地域歯科医療に対する社会的ニーズが高まり、歯科衛生士の活躍の場は歯科診療所以外にも広がっている。多様化するニーズに応えるためには、当病院歯科衛生士も今後は院外での歯科活動、特に地域貢献に関する活動に着目する必要があると考えた。そこで地域における歯科に対する要望の内容や程度を知るために、小学校などの施設を通じて調査を行ったので報告する。

【方法】

1. 当病院での地域貢献の内容調査及び当病院歯科衛生士の意識調査
2. 新潟市内の幼稚園・保育園・小学校・中学校に対する調査
3. 新潟市内某小学校において当病院歯科衛生士が行っている保健指導活動に対する評価

【結果および考察】

1. 当病院歯科衛生士に対する調査
   歯科衛生士全員に地域貢献活動は必要という意識があることが確認でき、地域活動に対する前向きな姿勢が伺えた。
2. 新潟市内の幼稚園・保育園・小学校・中学校への調査
   431 施設中 303 施設（70.3%）から回答を得た。今後の要望としては「歯科衛生士に関与してもらいたい」が全体の 65.3%を占めた。一方で「現状のままでよい」とする回答も 33%あり、年間行事や限られた授業時間数との兼ね合いが難しいという背景が理由として考えられる。
3. 新潟市内某小学校での調査
   「今後も歯科衛生士による保健指導を続けた方がよい」という回答が 100%となり関心の高さが伺えた。一方で保健指導を行ううえでの問題点として「45 分の授業時間では足りない」という意見があり、限られた時間の中で各学年の特徴に合わせた内容をわかりやすく端的に指導するための工夫が課題として挙げられた。

【結論】地域での歯科保健に対する要望や関心は高いにも関わらず、現状ではそれらに対して十分には応えられていないことが分かった。今回の結果を活かして、今後多方面からの要望に対応できるように、個人や集団としての知識・技術の修得と、システムの構築が必要と考える。また、こちらからも地域へ向けて活動を提示することで、歯科衛生士の活動の幅もさらに広がり、地域における歯科への関心もより高まると考えられる。

歯科衛生士業務に関する問題を明確にする取り組み

新潟病院歯科衛生科　○鈴木明子　坂井由紀
佐々木典子　高野貴子
関根千恵子　池田裕子
藤田浩美　三富純子
新潟病院総合診療科　近藤敦子

【目的】

近年、歯科衛生士を取り巻く環境は変化してきている。当院歯科衛生士が所属する歯科衛生士科では平成20年4月より患者サービス向上、リスクマネジメント、院内感染防止対策、歯科治療技術・材料、口腔ケア、学術・研究、教育の7つのグループを編成し、業務活性活動を開始した。この活動が潜在的な問題意識を顕在化させることにつながった。

そこで、当院歯科衛生士の業務改善を目的として、現在の問題点を抽出し明確化したので、その取り組みについて報告する。

【対象および方法】

対象：日本歯科大学新潟病院歯科衛生科
ワーキンググループリーダー（7名）

方法：1.ワークショップにてKJ法を用いた問題点の明確化
2.ラダーリング法を用いた研究課題の分析

【結果】

KJ法によりカテゴリー分類された問題点

1）歯科衛生士の地域貢献に関する問題
2）診療室における材料管理に関する問題
3）歯科衛生士による患者情報管理に関する問題

【考察】

KJ法を利用することにより問題意識や思考を純粋に収集、整理して問題を明らかにすることができたと考えられる。

また、その問題点をラダーリング法で分析し構成要素を明確にすることで、その後の研究計画のアウトラインへと円滑に展開することができたと考える。

【結論】

ワーキンググループの発足から3年が経過し、活動の成果が当院歯科衛生士の意識に少しずつではあるが反映されてきている。また業務をより円滑に遂行し貢献したいという意識の向上が生まれ、それがこの問題抽出という形で表れたと考える。

今回の取り組みは、当院における歯科衛生士業務の改善に有効と考えられ、継続して行いたいと考える。

当院における歯科衛生士の材料管理業務を改善するための取り組み

新潟病院歯科衛生科　○内山美幸　風間雅恵
白井かおり　松木奈美
高野貴子　関根千恵子
相方恭子　藤田浩美
新潟病院総合診療科　海老原　隆

【目的】

当院では歯科診療に必要となる材料の在庫数量管理・整備・衛生管理と不足補充分材料の発注・検収・受領・収納(以下材料管理)を診療科ごとに歯科衛生士が行っている。この業務を身体的・精神的な負担と感じている歯科衛生士は少なくないと思われる。その要因として、材料の種類・品目・数量が多いために作業が煩雑になっていることが挙げられる。さらに、現状の材料管理体制にも要因があると考えられる。材料管理にかかわる時間が定時に確保されていないため業務の合間を利用せざるを得ず、また他の業務との兼ね合いから優先順位として後回しとなりやすい。これらのことから材料管理業務の改善を目的として在庫の中央管理によるシステム化を検討し一部の材料において試験的に運用を行ったので報告する。

【対象】

歯科衛生士30名

【方法】

1）材料管理の現状調査
(1)実態調査
(2)アンケートによる歯科衛生士の意識調査
(3)歯科衛生士のタイムスケジュールの調査
2）業務改善案の計画と実行
(1)在庫一括管理

対象材料は4種類66品目で中央管理することにより在庫数を把握する。各部署では毎日定時に在庫確認と請求・受領を行い、材料管理方法のシステム化を図る

【結果】

在庫一括管理を行ったことにより、病院全体の在庫数量の削減ができた。また試行前と試行中の比較より、在庫管理に費やす時間に関する項目にのみ有意差が認められ、タイムスケジュール調査では、システム化されていることが示された。

【考察】

材料管理をシステム化することで全体の在庫量を一か所で把握することが可能となり、適正な在庫量を確保できると考えられる。また、経費削減にもつながると考えられる。歯科衛生士のみで行うことには限界があるため、各方面と協力して進める必要があると考えられる。

歯科衛生士が担当する患者の情報記録書式の標準化とその効果

新潟病院歯科衛生科　○長谷川沙弥　遠藤祐香
野島恵実　小山由美子　吉富美和　坂井由紀
鈴木明子　藤田浩美　三富純子
新潟病院総合診療科　阿部祐三
新潟生命歯学部歯周病学講座　両角祐子 佐藤聡

【目的】現在、当院において歯科衛生士が担当する患者の情報のうち、基本情報と指導計画は自記式の診療録にて管理し、口腔衛生指導の内容を当院規定の用紙にて管理している。これらは、自由記載が多い、必要な項目が少ない、不必要な項目が多いため追加記載しなければないなど非効率的である。患者情報として必要な事項を整理、標準化し、重要な情報を過不足なく記録することにより、記録に要する時間が短縮される。その結果、他の歯科衛生士業務の充実につながり、さらには患者の引継ぎを円滑におこなうための資料としても活用できると考えられる。

そこでわれわれは、患者情報の整理、標準化を目的とし、その一つとして歯科衛生士が行った口腔衛生指導や診療補助の記録についての書式を考案、作成、試行、評価したので報告する。

【対象および方法】

下記の4項目について検討を行った。

①歯科衛生士の担当する患者情報管理方法のアンケート調査

②関連文献、資料での患者情報管理方法の調査

③書式案1を作成し、当院歯科衛生科を対象に内容に関するアンケート調査

④書式案2を作成し、歯科衛生士7名で患者100名分の患者情報管理に用い現行の書式との比較・評価

【結果】記載に要する時間は書式案2において現行の書式と比較した結果、約2分の1に短縮された。また、記入のし易さ、フォントなどを得点に換算した結果、現行の書式は2.6点で書式案2は3.6点であった。

【考察】書式案2は患者情報の統一化を図るため、自由記載の項目を少なくし、項目にチェックする方式を用いたため、時間の短縮と患者情報の内容を一定のレベルで記録することができた。一方、書式の形式が一部不便であるという意見や、項目にチェックするだけでは物足りなさを感じるという意見もあった。今後、項目や記入スペースなどの再検討が必要と考えられる。

【結論】今回作成した書式案を使用することで、記入に要する時間が短縮され、他の歯科衛生士業務の充実につながるのではないかと考えられる。また、患者情報の質と量の標準化を図ることにより患者引継時などの資料として活用できる可能性が示された。

新潟病院総合診療科における診療用基本セットの使用状況調査

日本歯科大学新潟病院　歯科衛生科
○相方恭子　関根千恵子　澤田佳世
白井かおり　内山美幸

【目的】現在、日本歯科大学新潟病院では、診療科ごとに行っている滅菌作業の中央一元化を検討している。その試みとして、まずは総合診療科2・3におけるガス滅菌物に関して一元化を進めるため、医科病院中央材料室にて滅菌を行うことが決まり、6月より運用され現在継続中である。これはガス滅菌に限らず、ゆくゆくはオートクレーブでの滅菌についても一元化することが前提となっているが、限られたスペースの中で今までと同じように滅菌することは難しく、システムをどのように改善し、滅菌を行うかがとても大きな課題となることが予想される。そこで、現在のオートクレーブでの滅菌システムの中で、患者一人に対して必ず準備する診療用基本セットに注目し、私たちが洗浄・滅菌を行う器具の大半を占めているこの基本セットの内容に改善できる点があれば、滅菌物の量をかなり減らすことができ、一元化を行う上での問題点も解決できるのではないかということから、本調査を行った。

【対象】H23.5.10～6.3までの期間で総合診療科を受診した患者に準備・使用した基本セット内の器具

【方法】セルフチェックシートを作成し、診療補助についた際、術者が全く使用しなかった基本セット内の器具を記入し集計した。

【結果】総合診療科で行われているあらゆる処置において、基本セット内の6点すべての器具が使用されたケースは12%以下であった。ミラー・ピンセット・探針の使用率は平均して90%以上であったのに対し、焼きエキスカ・平型充填器・ストッパーは30%未満であった。特に焼きエキスカの使用率は低く、調査した処置16項目中4項目で0%、7項目で20%以下であった。

【考察】基本セットとして、必ず必要なのはミラー・ピンセット・探針の3点であることが推測される。また、このことは、実際に診療では使用されなかったが、同一バット上に乗っていた為に行われていた余計な洗浄・滅菌がこれほど多かったのだということにも言い換えられる。無駄な洗浄・滅菌を省くことは、滅菌物の量を減らすことになり、限られたスペースでの滅菌一元化の運用を可能にすると思われる。また、私たちスタッフの労力の減少にもつながり、空いた時間を別の業務に充てることもできる。滅菌システムの中央一元化を前に、まずは現行のシステムから見直す必要があると考える。